

日本音楽教育学会ニュースレター 第85号

目 次

1 学会からのお知らせ

1. 日本音楽教育学会第52回京都大会のご案内（第2報）…………… 田中多佳子 2
2. 会長・理事選挙結果報告…………… 高木夏奈子 4
3. 第10回ワークショップin千住（第1報）
「宮城道雄作品の魅力を探り、《春の海》の演奏に挑戦しよう」…………… 石上 則子・佐野 靖 5
4. 編集委員会からのお知らせ…………… 小川 容子 5
5. 『音楽教育研究ハンドブック』の活用（その2）
…………… 今川 恭子・小川 容子・有本 真紀・権藤 敦子 6

2 音楽教育の窓

1. 〈連載〉音楽・教育・学校（27）
「曲想」考…………… 伊野 義博 8
2. 【子ども・音楽・芸術～ハンガリーと日本～】「フォライ・カタリン，セーカーチ夫人
ヴィダ・マーリア，羽仁協子の繋がりの中で」オンライン講座に参加して…… 飯島 元子 9

3 会員の声

1. 音楽の「味薈」をひらく…………… 湯澤 卓 10
2. 歌を「聴く」子どもたち—コロナ禍における保育と歌—…………… 石川眞佐江 11

4 会員の新聞・近刊等紹介…………… 12

5 報告

1. 2021年度 日本音楽教育学会 第2回常任理事会…………… 13

6 事務局より…………… 16

〔編集後記〕

1 学会からのお知らせ

1. 日本音楽教育学会第52回 京都大会のご案内（第2報）

大会実行委員会委員長 田中 多佳子

第52回京都大会は10月16日（土）～17日（日）の2日間、京都教育大学に実行委員会事務局をおき、オンラインで開催いたします。大会実行委員会は大会テーマを「原点に立ち返って」とし、オンラインながら、例年通りあるいはそれ以上の規模と内容を目指して進んでまいりました。

皆様のご協力により、以下のように、研究発表（口頭発表）82件、共同企画10件、実行委員会企画、常任理事会企画プロジェクト研究、院生フォーラムと充実したプログラムとなりました。実行委員会一同、皆様のご参加を心よりお待ちしておりますと共に、充実した大会となりますよう一層努めてまいります。（大会参加の詳細は「申し込み用 Web サイト」（本誌16頁参照）をご覧ください。）

【実行委員会企画】 オンラインで発信する能の学習/指導

— 教育実践のケーススタディと提案：能《敦盛》を例に —

企画：奥 忍、菅 道子、笹野 恵理子、杉江 淑子、村尾 忠廣
出演：河村 晴久（能楽師・観世流シテ方・重要無形文化財「能楽」総合認定保持者）
協力：同志社中学校「学びプロジェクト」

現在の中学生にとって能はTV番組か、「お勉強」になっているように見える。しかしながら、そもそも芸能は参加することに意味があり、面白さは体験を通してこそ感じられるものである。そこで実行委員会企画では室町時代から能と深く関わってきた京都から、全国の中学生と教員に向けてどの地域においても可能な伝統音楽の学習/指導に関する提案をオンラインで発信する。

能を宗教的側面から見れば、祝言（祝福）と鎮魂が大きな意味を持つ。演目には天下泰平を寿ぎ、あるいは亡くなった靈魂が再びこの世に現れて、この世への執着を語り、鎮魂されるものが多い。日常生活では体験しない靈魂の世界や、極限状況におかれた人間が描かれる。これらは実は、親子や男女の情愛、あるいは危機に際した人間の心が描かれているのであり、我々の心の底の問題を顕在化させたものである。いいかえれば、能に触れることはいつの時代にも変わらぬ人の心に触れることでもある。能の存在意義は、主題が同時代性を持つところにあると考えられる。

今回取り上げる《敦盛》は、一人の少年の悲劇的な不条理、首を取った敵方の哀しみ、その後二人が「法の友」に至るまでを描いている。主人公と同年代の中学生に、日本の精神性、伝統美を伝える手立てを示したい。能に接することによって、日本や世界の文化を俯瞰できれば、どれほど心が豊かになるだろう。

ゲストに迎える能楽師、河村晴久氏は伝統音楽普及促進事業実行委員会を組織し、学校における能学習のための教材開発と指導実践を積み重ねてこられた。本企画では、河村氏と同志社中学校の協力を得て、オンラインを活かした学習/指導の可能性を探る。

【院生フォーラム】 音楽教育を2つの視点から考える

京都教育大学大学院生5名がコーディネーターとなり、全国の院生同士の学究的な交流の場を開設します。参加者の皆さんは、さらにA「音楽科教育」とB「音楽教育全般」のテーマ別に分かれて話し合い、最後に全員で意見共有を図る計画です。院生以外で興味のある学生やオブザーバー会員の参加も歓迎です。

【プロジェクト研究】（常任理事会企画）

小・中学校の連携を踏まえた音楽科授業の実践研究Ⅱ

—音楽づくり・創作と他の領域・分野との関連を図った学びの探究を通して—

企画担当理事 石上 則子・佐野 靖

プロジェクト研究2年次となる2021年度では、昨年度に引き続き、「小・中学校の連携を踏まえた音楽科授業の取組みを観察、記録、分析し、音楽科の学習指導及び授業研究の方法を問い直し、子ども・教師・教材（音楽）の新たな関わり方や学びの場づくりを探究すること」を目指して、研究を進めている。昨年度は、音楽づくり・創作の分野に焦点化した但、今年度はそれらの分野と鑑賞や歌唱、器楽との関連を図ることによって、子どもの学びがどのように深まていくのかを探究し、小・中学校の連携を踏まえた音楽科授業について考えようとしている。

昨年度の課題から、「小・中学校の連携」のとらえ方やその実際について学ぶこととし、毎月例会のオンラインミーティングに加えて、プロジェクト研究ワーキングチームの研究者を中心に、藤江康彦氏の講演を聴く機会をつくり、現在の「小・中学校の連携」の状況や教育学研究の潮流を学ぶ機会を得た。また、昨年度は、実践授業ごとのリフレクシヨングループでの授業カンファレンスを行ったが、今年度は、創作する内容ごとに、小・中学校実践者と研究者とが3つの合同グループを構成した。授業の録画を見ながら、小・中学校各々の視点、研究者の視点でカンファレンスを行い、各校種における学びの関連性、相違性等を協議する。さらに、記録、分析においては、昨年度実施した多角的な分析方法を活用し、一人の子ども、一つのグループに焦点を当て、他の領域・分野との関連による横の学びを分析することから、小・中学校の連携による縦の学びにどのようにつながるのかを考察する。

【日程表】（オンライン開催）

10月16日（土）						
9:00	12:10	13:10	14:00	14:10	16:00	16:10 17:20
口頭発表 A（Zoom 1） B（Zoom 2） C（Zoom 3） D（Zoom 4） E（Zoom 5） F（Zoom 6） G（Zoom 7） *A と G は 9:30 開始	昼休憩	開催挨拶 KMES 会長 招待講演 （Zoom 7）		実行委員会企画 オンラインで発信する 能の学習/指導 （YouTube + Zoom 7）		学会賞 受賞式 総 会 （Zoom）
	11:40～13:10 （Zoom 8） 院生フォーラム					

10月17日（日）						
9:00		12:10	13:10	14:40	14:50	16:20
口頭発表		昼休憩	共同企画		常任理事会企画 〈プロジェクト研究〉	
H（Zoom 1）	I（Zoom 2）		I（Zoom 1）		小・中学校の連携を 踏まえた音楽科授業の 実践研究Ⅱ (Zoom 8)	
J（Zoom 3）	K（Zoom 4）		II（Zoom 2）			
L（Zoom 5）	M（Zoom 6）		III（Zoom 3）			
N（Zoom 7）			IV（Zoom 4）			
共同企画			V（Zoom 5）			
Ⅷ 10:00～10:30			VI（Zoom 6）			
Ⅸ 11:10～12:10			Ⅶ（Zoom 7）			
(Zoom 8)			Ⅹ（Zoom 8）			

2. 会長・理事選挙結果報告

選挙管理委員会委員長 高木 夏奈子

「第25期日本音楽教育学会会長・理事選挙」は、会則、細則、選挙管理委員会規定、会長・理事選挙実施要領に則って2021年6月19日～7月5日の日程で実施され、7月10日に開票されました。

第25期日本音楽教育学会会長選挙の結果を下記の通り報告いたします。

記

有権者数：1,425

当選者（得票数）	次点者（得票数）	投票総数（票）	投票率（%）
榎藤 敦子（57）	津田 正之（27）	380	26.7%

投票総数 380 票（内 白票 5／無効 3）

日本音楽教育学会選挙管理委員会

委員長 高木夏奈子

副委員長 山本 幸正

委員 味府 美香

〃 市川 恵

〃 木下 和彦

第25期日本音楽教育学会理事選挙の結果を下記の通り報告いたします。

記

有権者数：1,425

地 区	当選者		次点者	投票総数／ 有権者数	投票率（%）
北海道	寺田 貴雄		尾藤 弥生	19/55	34.5%
東 北	今田 匡彦		川口 明子 杉田 政夫	36/84	42.9%
関 東	津田 正之	阪井 恵	石上 則子 小山 英恵	142/621	22.9%
	小畑 千尋	有本 真紀			
	木村 充子	今川 恭子			
	石井ゆきこ	嶋田 由美			
	山下 薫子				
北 陸	齊藤 忠彦		玉村 恭	30/65	46.2%
東 海	国府 華子	新山王政和	北山 敦康	45/134	33.6%
近 畿	笹野恵理子	菅 道子	高見 仁志	47/199	23.6%
	杉江 淑子		田中多佳子		
中国・四国 ※	伊藤 真	三村 真弓	高橋 雅子	35/163	21.5%
			寺内 大輔		
			藤井 浩基		
九 州	菅 裕		山崎 浩隆	25/104	24.0%
			山中和佳子		

投票総数 379 票（内 白票 2／無効 1） 全体の投票率 26.6%

※中国四国地区においては、日本音楽教育学会会長・理事選挙実施要領Ⅱ 6（4）により榎藤敦子会員の得票数と同数の他の2名を当選者とした。

日本音楽教育学会選挙管理委員会

委員長 高木夏奈子

副委員長 山本 幸正

委員 味府 美香

〃 市川 恵

〃 木下 和彦

上記の結果をもちまして、第25期会長・理事選挙が滞りなく実施されましたことをご報告いたします。会員の皆様にはご理解とご協力をいただき、心より感謝申し上げます。

3. 第10回ワークショップin千住（第1報）

「宮城道雄作品の魅力を探り、《春の海》の演奏に挑戦しよう」

企画担当理事 石上 則子・佐野 靖

本ワークショップは、現時点では感染症対策を十分に講じた上で対面実施を想定しております*。講師は、尺八演奏家・藤原道山氏。宮城道雄の人間像や音楽観に迫るとともに、《春の海》の演奏にチャレンジします。感染症対策や楽器の準備等を考慮し、参加者の上限を現時点では40名程度と考えております。楽器経験のない方、演奏体験はしないがワークショップは見学したい方もふるってご参加ください。スケジュール等あくまで現時点での目安です。詳細は、第2報でお知らせします。

日 時：2022年3月26日（土）10時～16時30分

場 所：東京藝術大学千住キャンパス（足立区千住1-25-1）

講 師：藤原道山（尺八演奏家）

参加費：会員1,000円（非会員1,500円）

日 程：10:00～11:45 宮城道雄作品の魅力を探る（講義形式）

13:00～15:00 箏・尺八を体験しよう—基礎・基本を学ぶ—

15:15～16:00 《春の海》を演奏しよう

16:00～16:30 質疑応答

※対面とオンライン配信を組み合わせても検討しております。感染症等の影響によって対面での開催が困難となった場合には、オンライン開催に変更いたします。

4. 編集委員会からのお知らせ

編集委員長 小川 容子

おかげさまで、会員の皆様からお寄せいただくオンライン投稿原稿が少しずつ増えてきました。学会での口頭発表をベースにしたものや、修士論文・博士論文の一部を投稿されるケースも散見され、大変嬉しく感じております。その一方で「あともう少し掘り下げてくれたら」という原稿もあります。

投稿される際は、他の学会誌に投稿していないこと、未公開のものであること等の基本的事項を確認するとともに、是非、指導教員や身近な先輩・研究仲間に相談することをお勧めします。多くの目で確認することによって、ケアレスミスが見つかったり、図表の解釈が異なったり、場合によっては思いがけないアイデアやヒントを得て、結果や考察がより深まることもあります。

皆様の投稿をお待ちしております。

音楽教育実践ジャーナル vol.20（通巻33号）

2022年12月発行予定の音楽教育実践ジャーナルのテーマは、「部活動指導のあり方」を取り上げます。部活動の指導は、学校教育における音楽活動の問い直しであり、同時に、外部との連携のあり方へと波及する問題を内包しております。外部指導者との連携、外部委託の問題、顧問教員の役割など、さまざまな切り口からのリサーチ・クエスチョンが考えられます。同封のちらしもご覧になってください。特集テーマに関わらない自由投稿も、もちろん大歓迎です。

たくさんのご応募、お待ちしております。

5.『音楽教育研究ハンドブック』の活用(その2)―常任編集委員より ①―

ここからはじまる,ここにもどる

今川 恭子(聖心女子大学)

「まえがき」を書くにあたり、50年を振り返った時(設立時の本学会を知っているわけではありませんが)、現在の社会が経験している変化の兆しが学会設立当時既に具体的に見えていたことに、得も言われぬ感慨を覚えました。私たちは今、先が見通せない変革の時代にあると背中から急かされ、「改革せよ」「工夫せよ」と迫られています。しかしそのような時だからこそ、設立50年を記念する書は来し方を冷静に評価し、目の前に繰り広げられる人々のリアルな営為に目を向け、そして本質を論じるものでありたいと思いました。直面する課題や新しい概念を吟味するオープンな議論のプラットフォーム形成、さらには音楽教育の外からの思考が風通しよく入るプラットフォーム形成に貢献する書になってほしいというのが、とりわけ第1部「音楽教育研究の視座」構成の根底をなす考えでした。第1章「1 人と音楽」は、7本の原稿の内3本を学会外の方々に委嘱しましたが、いずれも人間が太古の昔から、あるいは生まれた時から「音楽すること」「音楽を伝え・教え・学ぶこと」によってつながり合ってきたことへと、そして人間社会形成の根底に音楽が普遍的かつ多様でありつづけてきたことへと、私たちの目を向けさせるものです。「ここからはじまる」「ここにもどる」というのは、編集委員として次々に集まる原稿を読みながら抱いた率直な感想でした。

現在本務校の授業では、リベラルアーツ教育の一環として「人間と音楽のかかわり」の本質を考えるための出発点として、また「子どもたちはなぜ、なんのために音楽をするの?」という根源的な問いを抱いた時の参考図書として本書を示しています。見開き2頁に凝縮された内容と充実した参考文献は、その先へと学びを進めるための羅針盤となっています。

読み込んで使い倒す

小川 容子(岡山大学)

第2部「音楽教育研究の方法」では、研究計画の立て方と、研究の組み立て方をとりあげました。研究を始める前に綿密な計画を立てることは、当然です。しかし、いつも計画通りに順調に進行するとは限りません。予備実験やフィールド調査、機材を用いた行動観察などに着手すると、さまざまな調整や変更をしなければならないことがあります。得られたデータが予想外であったり、思いがけない発見があったりしたときには、計画を見直すことも多々あります。そうした時には、改めてこの本を開いて「私のリサーチ・クエスションは・・・」に立ち返っていただけると、本筋を見失うことなく研究の全体像に向き合うことができると思います。小項目として掲げた「研究の方法を考える」「データと向き合う」「研究の手法を知る」「研究の対象を明らかにする」「研究の場を決める」も、具体的な研究場面を想定した執筆内容になっておりますので、ヒントになる部分が多いことでしょう。

私の授業(博士課程)では、各自が研究計画を立てる時とお互いの進捗状況を報告・共有する時、そして研究成果がある程度まとまってきた頃に、この本を使って意見交換をしています。繰り返し読むことで、ぼんやりとした理解が実感を伴った理解へと変わるようです。自身が扱わなかった研究方法であっても、その手法に取り組んだ仲間と協議することで、書かれている文章の背景がありありと立ち上がってきます。投稿論文を作成するときに、もう一度確認をするといった使い方もできるでしょう。一字一句丁寧に読み込むことで新しい世界が拓けると思いますので、皆様も使い倒してみてください。

最初の読者の一人として

有本 真紀（立教大学）

2016 年の準備会から始まった本書の編集作業は、2019 年春から 8 月下旬にかけて佳境を迎えていた。編集委員会の加藤委員長、権藤常任編集委員とともに、カバー、表紙から索引、奥付に至る全ページに目を通す役となり、担当委員や、時には執筆者ともやりとりを重ねた。1 冊の本が出来上がっていく過程には、少し大変なこともあるが、その何倍もの楽しみが味わえる。特に、122 名の執筆者による、109 のトピックから成るこの本の編集はとても楽しかった。会員のみなさまには申し訳ないが、いずれも内容の濃い原稿を最初の読者の一人としてお先に読ませていただくことに心が躍った。最初はベタ打ちだった原稿がレイアウトされ、打ち合わせと 4 校までの校正を繰り返す間に、次第に本の形になっていった。今、どのページを開いても、ゲラにどう赤入れをしたのかを覚えている。この本が退職前に送り出す最後の 1 冊とおっしゃっていた音楽之友社の岸田雅子さんには、編集とさまざまな調整に全力を注いでいただいた。何度か校正紙を岸田さんと直接受け渡したことも懐かしい。

残念ながら、この本をフルに使える授業は担当していないが、このセクションを読んでみたらと紹介することがある。すると、誰からも「全部読みました」という反応が返ってくる。2 頁または 1 頁の中に凝縮し尽くされたエッセンスが詰まっているので、初学者には補足説明も必要になるが、その対話自体が私にとっても新たな発見をもたらしてくれる。一見、各人の研究テーマに合致する項目でなくとも、むしろ重要な示唆が得られることが多い。当該トピックについての情報を得ることはもちろん、そこから諸問題へと開かれた扉になっているからである。扉の中の景色について対話しながら奥へと進んで行くための案内書——その最初の読者の一人となれたことを幸せに感じている。

小さな「問い」から

権藤 敦子（広島大学）

「音楽教育研究に携わるすべての方々にとってその指針を探すための書」（あとがき）を刊行するにあたって編集委員会で意識し続けたことは、「基礎の学、応用の学、実践の学を包摂しながら今をみつめ、未来を展望していく」（まえがき）ことの重要性であり、「一人の研究者が取り組む範囲と課題には限界がある」からこそ、ともに「今をみつめ、未来を展望していく人々の集団」としての学会から「ハンドブック」を提案することの意義だったように思う。そうした思いを形にするためにどうしたらよいのか議論を重ね、何度も構成を練り直し、試行錯誤を繰り返す過程において多数の方々の協力を得ることができ、今考えられる最善のかたちにしたのではないかなと思う。

趣意書も何度も書き換えられた。そのなかで加藤委員長は一貫して「想定する読者層は、音楽教育研究に携わっている、あるいはこれから携わろうとしているすべての人々」と書いている。単なる事項説明のための事典ではない。本学会の多様な立ち位置の会員が「研究」に取り組もうとする際に気軽に相談できるてびきを目指して、執筆者の方々と何度もやり取りをし、出版社と調整を繰り返し、内容、構成、見開きや文字のレイアウト、参考文献、索引等々、すべて手づくりで進められた。

音楽教育に関わるなかでなにかしら疑問を抱く場面は誰にでもあると思う。その小さな「問い」がどういう背景から生まれ、どのような位置付けをもつものか、ハンドブックをめくりながら索引から探しながら考えていると、思いがけない手がかりを得ることができる。あるいは、目次から始めて、一つ一つの項目を自分なりに考えつつその頁を開くと、視界が開け、その問いにかかわる過去・現在・未来が見えてくる。小さな「問い」が研究へとつながる、そんな出会いがたくさん生まれてほしい。

2 音楽教育の窓

〈連載〉音楽・教育・学校 (27)

1. 「曲想」考

伊野 義博 (新潟大学名誉教授)

「曲想」とは不思議な用語だなあと常々思っている。「曲想」は、日本の音楽教育、とりわけ学校の音楽授業では必要不可欠なものとなってきた。過日、テレビ放送である作曲家が「この曲の曲想は～」と語るのを聞いたが、今や学校を飛び出して普通に用いられてもいるようだ。

しかしながら、この用語、日本語としても、音楽用語としてもその位置づけは浮遊している。ちなみに手元にある『広辞苑第二版補訂版』(1976)、『岩波国語辞典第四版』(1988)では、掲載されていない。音楽之友社の『新訂標準音楽辞典』(1991)、平凡社の『音楽大事典』(1982)にも見当たらない。本学会編の『日本音楽教育事典』(2004)においても取り上げられてはいない。しかし『大辞林第三版』(2006)では、「楽曲の構想。また、曲の主要なモチーフ」とある。『広辞苑第六版』(2008)になると、「楽曲の構想」「楽曲のもつ雰囲気」と説明されている。この事実から鑑みるに、本用語は、おそらく長年にわたる学校の音楽教育を経て市民権を得てきたものの、音楽の専門的用語としては、認知されていないものと思われる。「曲想」は現在「辞書的」には「楽曲の構想」、「楽曲のもつ雰囲気」の2つの意味を有し、学習指導要領では、主に後者の意味で使用されている。文科省のHPでは、musical mood 他、いくつかの英訳が試みられていて、なかなか考えさせられる。

「曲想」は、すでに1947年の学習指導要領(試案)において散見される。例えば、『冬の朝』は全体をなだらかな曲想で美しく歌わせる(第3学年)、『野ばら』は優美な曲想を出すことに注意する(第6学年)といった具合だ。今次改訂においては、資質・能力のうち、「知識」に関する指導内容について「曲想と音楽の構造との関わり」を理解することが、すべての領域・分野で示された。「曲想」は、「その音楽固有の雰囲気や表情、味わい」であり、「一人一人が自己のイメージや感情を伴って、音楽との相互作用の中で感じ取る」ものと説明される(中学校学習指導要領解説音楽編)。

曲想には、「音楽そのもの、音楽自身」が醸し出す雰囲気や表情といった意味合いが強い。そこには音楽自体が主体性を持っており、自身で何らかのムードを醸し出し、周囲がそれを受け止め、味わうといった発想がうかがえる。この際、音楽が醸し出す「曲想」と、受け取る個人の「イメージ」は区別される。しかし、こうした認識の仕方は、普遍性を持っているのだろうか。そもそも「音楽固有」の雰囲気というものは、存在するのであるか。ちなみに「うさぎ追いかの山」と歌う「ふるさと」の「なつかしさ」は、万国共通だろうか。日本の音楽を「単調な響きで喧しく鳴りひびき、ただ戦慄を与えるばかり」(『ヨーロッパ文化と日本文化』岩波文庫)と評した宣教師ルイス・フロイスは、「曲想」を感じ取れなかったのだろうか。「曲想」に文化的背景が強く影響するとしたら、「音楽固有」という見方は崩壊する。それはむしろ「共同主観的」なものかもしれない。

さて、「曲想」はどこにあるのだろうか。音楽側か、人間側か。玉村恭は、世阿弥の能楽論を語る中で、世阿弥の言う「花」は「演者と観客の間に棲まうもの」と述べる(『おのずから出て来る能 世阿弥の能楽論、または〈成就〉の詩学』春秋社)。「曲想」は、音楽と人間の「間に棲まうもの」であって、知的理解や概念化とは別に感じ取られるものではないか。そこには、芭蕉が「古池や～」と詠んだ時の「対象との感応」に通底するものがあるのではないか。従って、我々が日常的に纏う「主観-客観」といった認識法とは別次元で捉えないと正体を見誤るのではないか。そうだとすれば、存外この用語は、音楽教育の未来を拓く切り口になるかもしれない。いや、あるいは、諸刃の剣か。

2. 【子ども・音楽・芸術～ハンガリーと日本～】

「フォライ・カタリン、セーカーチ夫人ヴィダ・マーリア、羽仁協子の繋がりの中で」
(ハンガリー文化センター東京主催) オンライン講座に参加して

飯島 元子

ハンガリー文化センター東京が主催するオンライン講座シリーズが、2021年5月15日より6回にわたり開催された。キーパーソンは、フォライ・カタリン（コダーイの弟子。ハンガリーにおける幼児音楽教育の方法論を組み立て、実践。1926-2004）セーカーチ夫人ヴィダ・マーリア（幼児芸術教育の専門家、日本において美術教育を研究。1916-2000）羽仁協子（ヴィダ・マーリアの研究に助力。フォライの協力を得てコダーイの理念を日本に応用。1929-2015）、各回の講師と内容は下記の通り。

- 第1回 伊藤直美「コダーイの音楽教育～日本への導入と広がり～」
- 第2回 セーカーチ・アンナ、チョマ・オルショヤ「日本・ハンガリー外交関係復活後の文化交流～音楽教育と美術教育の領域において～」
- 第3回 ヘゲドゥーシ夫人トート・ジュジャンナ「ハンガリーと日本におけるフォライ・カタリンの幼児音楽教育のルーツ～羽仁協子の手紙とフォライ・カタリンの日記を基に～」
- 第4回 ゴルダン夫人オラー・マルタ「日本の幼児教育者からの質問と実践上での答～フォライ・カタリンの日本滞在日記をもとに～」
- 第5回 ヘゲドゥーシ夫人トート・ジュジャンナ「フォライ・カタリンへの音楽教育方法論の質問～羽仁協子からフォライへの手紙と邦訳本の分析～」
- 第6回 知念直美「フォライさんとの出会い、そして学びと感謝」

ハンガリーのケチケメート市にあるリスト音楽芸術大学附属コダーイ・ゾルターン音楽教育研究所のアーカイブには、多数の古い録画やメモも含め、フォライ・カタリンの業績に関するものが全て寄贈され保管されている。フォライの知的遺産はここで見るができる。講座では、各発表者が、アーカイブに残されたフォライ・カタリンの日記、羽仁協子からの手紙等を読み解き、それぞれの立場からの着眼点をもって研究されたいろいろな角度からの事情を知ることができ、大変興味深い。

6回にわたるオンライン講座シリーズにより、日本でおこなわれているコダーイの考えに基づく幼児音楽教育のルーツが紐解かれる。1930年代にはすでに、園部三郎（1906-1980）によりコダーイとバルトークの民族音楽の研究業績が日本に紹介されたという（第1回）。コダーイの理念を美術教育にまで拡大したヴィダ・マーリアは、著書に美術の母語（民族固有の芸術）から教え始めないといけないと書いた（第2回）。日本ではヨーロッパ、主にドイツの子どものうたに日本語の歌詞をつけて歌わせていた（第3回）。「音楽は人格形成において欠かすことのできないものである。音楽教育はどの民族も、自国のわらべうたから出発しなければならない」コダーイの言葉より（第4回）。羽仁協子がわらべうたから始まる音楽教育を日本へ応用しようとした時の様々な困難（第5回）。フォライ・カタリンの温かい人柄を感じるエピソード（第6回）など、印象に残る。

コダーイの理念を土台にしたフォライ・カタリンの理念をもとに、5人の発表者は現在につながる実践の展開を見事に検証された。それぞれのご研究を拝聴しながら、まさしく理念あつての実践だと、理念の大事さ、大切さを痛感する。そして、今、日本でいろいろな分野で展開される「わらべうた」に繋がる先人たちの経緯をこの講座で知り、その重みを思う。

このオンライン講座シリーズは、ハンガリー文化センターのYouTubeチャンネルにて公開されているので、ご覧頂きたい。

3 会員の声

1. 音楽の「味藪」をひらく

湯澤 卓（上越市立春日小学校）

新型コロナウイルスの影響は、学校における音楽授業を直撃しました。授業中のマスクの着用、使用後の消毒、演奏活動の制限など、音楽にとっては逆風と言える事態が押し寄せ、苦境と表現するにふさわしい日々が続き、それは今なお継続しています。そんな中でも、対策を講じ、子どもたちに音楽の楽しさを伝えるために日々奮闘されている学会員の皆様に、心からの敬意を表するとともに、エールを送ります。一緒に、がんばりましょう！

私は現在、小学校2年生の担任をしています。毎日34人の子どもと教室で勉強したり畑で野菜を世話したりと忙しくも充実した日々を過ごしています。今回は、音楽の授業で印象的だったシーンから考えたことをご紹介します。

先日、音楽の授業で「ドレミの歌」を取り上げました。何気なく「この歌、聴いたことある人？」と尋ねると、3人が手を挙げるだけ。とても驚きました。確かに、彼らは平成25年～26年生まれ。「ドレミの歌」は1965年の曲ですから子どもたちにとって馴染みのない曲だとは思いますが…40と数歳の私がなんとなく驚いてしまう気持ち、みなさんもお分かりいただけるのではないのでしょうか。

2年生の子どもたちも、最初のうちは聴き慣れない曲に戸惑っている様子が見られました。しかし、聴き始めてすぐに「歌詞の中に『ドレミ』が入っている」「途中は『ドレミ』だけで旋律ができています」と気付きました。何度も聴き、「ドレミ体操」や担当する音を分担しながら歌う活動などを取り入れると、もう愛唱歌の仲間入りです。「もっと聴きたい」「歌詞を覚えたから一人で歌いたい」と夢中になって楽曲と向き合う様子が見られました。2時間の単元でしたが、歌詞を全部覚えてしまったり、中間部の「ソ〜ド〜ラ〜ファ〜」の部分を「ドレミ体操」を取り入れながら歌うことができるようになったりと、一人一人の子どもが楽しんで楽曲と関わることができた充実した時間となりました。

大人の世代にとっては当たり前の曲であっても、子どもにとっては未知の曲。考えてみれば当然なのですが、日々授業をしているとそれを忘れてしまいがちになります。教材準備をしているのだけけれど、子どもの視点を見失ったり子どもの「今」を忘れていたりして、本当に子どもにとって大事なことが何なのかを置いてきぼりにしているような気がしていました。

味を感じる細胞のことを「味藪^{みらいつ}」と言います。調べてみると、味藪は12歳ごろまでに育つのだそうです。美味しいものを美味しいとしっかり感じる細胞の働きがあると、きっと人生は豊かになります。

「ドレミの歌」で楽しむ子どもたちの様子を見て、今回の授業では子どもの音楽的な「味藪」をひらく手伝いができたのではないかと、思うようになりました。教える内容にフォーカスすることも大切ですが、楽曲との出会いや音楽にどっぷりと浸ることができる時間も大事にする必要性を改めて感じています。体を動かす活動や、気づきを共有する時間も、もっと大切にしていきたいです。コロナ禍で臆病になっていた自分の授業づくりを振り返り、子どもたちの音楽を楽しむ姿に目を凝らしながら授業づくりを再構築していこうと考えています。私自身も楽しみながら、子どもたちと一緒に、たくさんの音楽にふれ、楽しみ、子どもの音楽的な「味藪」をひらく授業づくりを続けたいと思います。

2. 歌を「聴く」子どもたちーコロナ禍における保育と歌ー

石川 眞佐江（静岡大学）

コロナ禍において、保育現場で「歌」はどうなったのだろう。現場を訪れることも、公開保育等の機会も制限されて一年以上が過ぎ、そのことがずっと気になっていました。私は幼児の生活において「既存の楽曲」を歌うことの意味について研究をしてきました。子どもたちは、受け止めた作品を自分の中に蓄積していき、さまざまな場面で自由に引用していきます。それは例えば、かたつむりを見て《かたつむり》（文部省唱歌）の一節を口ずさむ、というように、目の前の事物に直接つながる歌であることもあれば、快晴の空を見上げて突如《そうだったらいいのにな》井出隆夫作詞・福田和禾子作曲）を歌い出すというように、置かれた状況とは直接結びつかないような、しかし子どもたちの中では確かに、何らかのイメージと緩やかに関連づいて想起されるような歌であることもあります。記憶、経験、感情……子どもの中に蓄積された数々の歌は、このように時折、彼らの生活のあちこちに不意に顔を出します。幼い子どもにとって、歌は時に言葉よりも早い表現の手段のひとつであり、彼らがどのように歌を自分のものにして駆使しているのかに興味を持って研究を続けてきました。

さて、管見の限り、保育現場における一斉歌唱活動はこの一年間あまり、かなり制限されていたように思います。聞き及ぶ範囲、また身近な範囲での事例では、「クラス全員での歌唱は行わない」「少人数グループでの歌唱のみ行う」「保育者が歌うのを聞かせる」「CDなどの音源で歌を聞かせる」「クラスを半分に分け、半分ずつ歌う」（いずれもマスク着用の下での、3歳児以上の事例）などの取り組みが見られました。我が子の通う園では、一斉歌唱は一切行われなくなっていました。その代わり、月の歌として保育者が選曲した三〜四曲の楽譜が毎月保護者に配られました。そして、園からの配信チャンネルにおいて、保育者が演奏する歌の動画が配信されるようになりました。

このような状況の中で、子どもと歌の関係はどのように変わっていくのだろうか？ と私は興味深く見守っていました。一斉歌唱活動ありきとは決して思わないものの、保育において「みんなで一緒に歌う」という形態が長年重要視されてきたことは間違いなく、また子どもたちが実際に声を出して歌う機会は明らかに激減していたからです。

意外なことに、我が子はそのチャンネルの動画を何度も何度も繰り返し再生することをせがんできました。楽譜を見て、私が「弾いてあげようか？一緒に歌う？」と言ってもさして気乗りのしなそうな顔をしていたにもかかわらずです。その動画を見た感想を保育者に伝えては「〇〇先生歌がうまい」や「来月は〇〇の歌がいい」などとリクエストをしていたようです。そしていつの間にか、動画で紹介されていた歌をすっかり覚えてしまっていました。また、先述した「クラスの半分ずつで歌い、お互いの歌を聴く」という実践をしていた園の保育者に何うと「友達が歌うのを聞いて、自分も歌いたいという気持ちが高まっている」「人の歌を聴くという経験が新鮮で、コンサートのように場を設けたりして楽しんでいる」と言った話が上がってきました。

このように、図らずも浮かび上がってきた「聴くこと」の重要性に改めて目を向けさせられました。音楽の基本は「聴くこと」から始まる……それは幼児期に限らず、歌唱や楽器の演奏においても同じであるように思います。発信、表現が制限された中で、「聴く」ことでどんな経験が深まるのか、新たな視点を持ってまた子どもと歌の関係を丁寧に見ていきたいと思われました。

4 会員の新刊・近刊等紹介

★城 佳世編著／八木 正一監修『スキマ時間を活用した音楽科授業プラン（ライブ! 音楽指導クリニック①）』160 頁 ISBN : 978-4-7619-2721-9・『評価が手軽にできる音楽科授業プラン（ライブ! 音楽指導クリニック②）』160 頁 ISBN : 978-4-7619-2722-6・『学校行事で使える音楽活動のアイデア（ライブ! 音楽指導クリニック③）』152 頁 ISBN : 978-4-7619-2723-3 いずれも、学事出版 2021/6/16 A5判 [本体 1,800 円+税]

①スキマ時間に基礎・基本が学べる授業プランを掲載。電子黒板やタブレットでそのまま授業ができるパワポ教材付き。

②新学習指導要領に準拠。新しい評価の観点で取り組める授業プランを掲載。子どもの実態に合わせて書きかえ可能なパワポ教材付き。

③子どもたちの音楽的な力を大きく成長させる学校行事。パワポ教材でやさしく取り組めるアイデア満載。

★石崎 和宏他編／権藤 敦子／笹野 恵理子／重森 栄理／高倉 弘光／津田 正之／寺内 大輔 他著『初等生活教育，初等音楽科教育，初等図画工作科教育，初等家庭科教育，初等体育科教育，初等総合的な学習の時間』（新・教職課程演習 第 15 巻） 協同出版 2021/6/30 A5判・227 頁 ISBN : 978-4-319-00356-3 [本体 1,800 円+税]

生活，音楽，図画工作，家庭，体育，総合的な学習の時間の教科等ごとに章構成。学習指導の基本的な概念が理解されやすいよう，共通する学習指導に関わるポイントを Q&A 方式で解説している。

★近藤 真子／岩井 智宏著『「常時活動」を位置づけた小学校音楽の新授業プラン』（音楽科授業サポート BOOKS） 明治図書出版 2021/7/9 B5判・128 頁 ISBN : 978-4182944130 [本体 2,000 円+税]

本活動の学びが大きく変わる！常時活動を生かすための秘訣や全学年・領域分野別の楽しい授業アイデアを海外の音楽教育をふまえた理論も交えながら，分かりやすく紹介。ICT 活用のアイデアも多数。

★吉永 早苗著『音からひろがる子どもの世界』（イラスト BOOK 楽しい保育） ぎょうせい 2021/7/20 B6判・140 頁 ISBN : 9784324109939 [本体 1,400 円+税]

音に遊び，音を遊び，音と遊ぶ子どもの姿。子どもの音感受と素朴な表現に共感することから始まる音感受教育，聴くことを遊ぶアイデア，環境づくりなど，子どもや保育実践に学んだ研究を，実践に生かしていただきたい願いを込めて書きました。

★副島 和久・伊野 義博編著『指導と評価がつながる! 中学校音楽授業モデル 第 1 学年』128 頁 ISBN:978-4184488137 [2,160 円+税]・『指導と評価がつながる! 中学校音楽授業モデル 第 2・3 学年』・152 頁 ISBN : 978-4184489172 [本体 2,200 円+税] いずれも，明治図書出版 2021/8/6 B5判

中学校音楽授業における「指導と評価の一体化」の実現に向けて，授業づくりのポイントを解説するとともに，指導案形式で題材例を豊富に掲載している。主体的・対話的で深い学びのためのアイデアと新観点に基づいた評価の実践が示され，実践に直結させることができる。

5 報告

1. 2021 年度 日本音楽教育学会第2回常任理事会

日 時：2021 年 7 月 11 日（日）13:30～15:00

場 所：オンライン開催（Zoom）

出席者：今川、本多、木村、石上、小川、権藤、齊藤、佐野（記録）、嶋田、杉江

【会務報告】〈2021 年 4 月 24 日以降〉（木村）

- 5 月 8 日 2021 年度第 1 回編集委員会（オンライン）
- 5 月 18 日 ニュースレター第 84 号発行（Web 発行）
- 6 月 15 日 第 52 回大会研究発表・共同企画申込・要旨締切
- 6 月 19 日 第 25 期会長・理事選挙関係書類発送
- 7 月 5 日 第 52 回大会研究発表受理通知
- 7 月 10 日 第 25 期会長・理事選挙開票（事務局）
- 7 月 11 日 2021 年度第 2 回常任理事会（オンライン）

【メール審議の報告】〈2021 年 4 月 24 日以降〉（木村）

- ・4 月 24 日理事会以降 6 月 15 日までの正会員新入会 24 名および退会者（正会員申出退会 4 名、自然退会 39 名、特別会員自然退会 1 名）について承認。
- ・第 52 回大会で韓国音楽教育学会 Kim Mi Sook 会長に「招待講演」をお願いすることを承認。
- ・理事の被選挙権に関する細則第 17 条「ただし、通算して理事を 8 期つとめた会員は、被選挙権者となることができない。」について、「一度退会して再入会の場合、以前の在籍中の理事経験も通算年数に含める」ことを確認。

【審議事項】

1. 新入会員及び退会者について（木村）

6 月 15 日 ML 承認以降の正会員新入会 2 名、学生会員新入会 1 名、申出退会 3 名が承認された。
（2021 年 7 月 10 日現在、正会員 1,565 名、学生会員 3 名、名誉会員 2 名、特別会員 2 名）

2. 2021 年度補正予算について（杉江）

7 月 10 日現在の会員数実数を反映させた補正予算（案）について、承認された。

3. 2022 年度予算について（杉江）

7 月 10 日現在の会員数実数を反映させた 2022 年度予算（案）の説明があり、承認された。

4. 第 52 回大会について（報告も含む）

(1) 大会実行委員会より（杉江）

実行委員会企画の内容、ゲスト出演者や授業協力校、今後のスケジュール等について説明があった。また、大会本番の実行委員会企画にうまくつなぐために前もって 9 月の近畿地区例会で試行することを受けて、それを近畿地区以外の会員もオンラインで視聴できないかとの質問があり、実行委員会に持ち帰って検討することとなった。

(2) 企画担当理事より（石上・佐野）

日程及び発表件数について報告があった。口頭発表は 82 件で、2 日にわたり 7 会場での発表となる。共同企画は 10 件で、2 日目の午前・午後に 8 会場で行われる。また、常任理事会企画（プロジェクト研究）について、進捗状況、今後の計画、スケジュール等について報告があった。

(3) 事務局より（木村）

発表申込および参加申込他、今後の進め方について報告があった。

【報告事項】

1. 第 25 期会長・理事選挙結果について（高木→今川）

第 25 期会長・理事選挙結果について、高木選挙管理委員長の開票結果報告に基づき、今川会長より報告があった。なお、理事選挙において次点者同票が複数地区で生じたため、当選者辞退の場合に鑑み、あらかじめ繰り上げ当選順位のくじ引きを選挙管理委員会が行い、その結果を事務局にて厳封、保管した旨報告され、了承された。

2. 第 13 回 APSMER 東京大会について（水戸・小川・本多）

水戸実行委員長より書面において進捗状況の報告があった。加えて、小川、本多委員より、7 月 10 日現在、フルペーパー投稿件数は 53 件、発表件数は合計 157 件（口頭発表 100 件、ポスター 44 件、パネル 5 件、ワークショップ 8 件）であることが報告された。

3. 第 10 回ワークショップについて（石上・佐野）

企画担当理事より、ワークショップ案が報告され、内容について承認された。年度末の日程のため、関東地区例会との合同開催の可能性も含め、引き続き検討することとなった。

4. 各委員会等報告

(1) 編集委員会（小川）

5 月 8 日開催の第 1 回編集委員会において、『音楽教育学』投稿の研究論文 2 本が掲載可、『音楽教育実践ジャーナル』vol.19（通巻 32 号）特集投稿で 7 本が掲載可、自由投稿で 4 本が掲載可となったことが報告された。

8 月 25 日発行予定の『音楽教育学』第 51 巻第 1 号には、投稿論文 2 本、研究報告 2 本、書評 3 本、地区例会 8 本が掲載予定である。

2022 年 12 月発行予定の『音楽教育実践ジャーナル』vol.20（通巻 33 号）の特集テーマについて、「部活動指導のあり方」に決定し、ホームページ、ニュースレターで告知、周知するとの報告があった。

(2) 広報委員会（梅藤）

ニュースレター第 85 号の頁割について報告があった。7 月 26 日に入稿予定。

(3) 音楽文献目録委員会（長野→木村）

委員会議事録による報告があった。

〈次回会議の予定〉

第 3 回常任理事会 10 月 15 日（金） 13 時～14 時 30 分 オンライン（Zoom）

第 2 回理事会 10 月 15 日（金） 14 時 30 分～16 時 オンライン（Zoom）

【資料】新入会員について

(2021 年 7 月 11 日現在 正会員 1,565 名 学生会員 3 名 名誉会員 2 名 特別会員 2 名)

◆正会員 新入会員 (2021 年 4 月 24 日理事会報告以降)

個人情報保護のため削除しました

正会員新入会 26 名

◆学生会員 新入会員 (2021 年 4 月 24 日理事会報告以降)

個人情報保護のため削除しました

学生会員新入会 1 名

次号のニュースレターはオンラインでお届けします！

2021 年 12 月 18 日発行ニュースレター第 86 号はウェブ版のみのお届けです。学会ウェブサイトの「マイページ」にアクセスしてご覧ください。一般公開用は従来通りトップページからご覧いただけます。紙媒体での次のお届けは 2022 年 3 月の第 87 号です。ご投稿お待ちしております。

6 事務局より

事務局長 木村 充子

1. 第52回京都大会（オンライン開催）について

- ・本大会への参加は、「申し込み用 Web サイト」<https://sec.tobutoptours.co.jp/web/evt/52ongaku/>（学会 HP よりアクセス可）での事前申込（参加申込〆切：9月24日（金）15時）のみ受け付けます。当日参加は一切受け付けませんのでご注意ください。
- ・大会参加費は¥4,000、支払〆切は2021年9月30日（木）です。参加申込後のキャンセルおよび返金はできません。
- ・大会に関するお知らせは、学会 HP および「申し込み用 Web サイト」にて随時ご確認ください。総会を欠席される方は、必ず同封のハガキ（委任状）に必要事項をご記入の上、ご投函ください。（10月8日（金）必着）

2. 年度会費納入のお願い

会費の期限内納入にご協力ください。会費未納の場合、大会での発表、送付物の受け取り、論文投稿などに支障が発生します。2年間会費を滞納すると自然退会になります。会費納入後、約2週間で事務局より年会費振込の確認メールが自動送信されます。メールが届かない場合は事務局までご連絡ください。

3. 会員情報（所属先・住所など）の変更について

学会からの送付物が「宛先不明」にて戻ってきってしまうことが少なからず生じています。所属先・住所等に変更があった場合は、速やかに修正登録をお願いします。会員情報の変更は事務局では受け付けておりません。学会 HP「会員専用ページ（「マイページ」）」からご自身で変更していただきますようお願いいたします。メールアドレスが未登録の方は「マイページ」に入ることができませんので、事務局まで至急メールアドレスをご連絡ください。

4. 事務局について

新型コロナウイルスの影響拡大に鑑み、ご用件はEメールでのみ承っております。ただし、お返事までに数日かかることがあります。ご了承ください。

【編集後記】

本誌の編集作業真っ只中の7月後半。どこも酷暑に見舞われています。感染症対策・熱中症対策と気の抜けない日々。皆様、どうかご自愛ください。

さて、前号（84号）はweb配信されました。ご覧いただけたでしょうか。web版と紙媒体その特性をうまく利用しつつ皆様に有意義なニュースレターをお届けしたいと、委員長を中心に誌面の検討を重ねております。皆様からも、最新の情報やご意見をお願い申し上げます。（村上 康子）

【日本音楽教育学会事務局】

所在地：〒184-0004 東京都小金井市本町 5-38-10-206 Tel. & Fax. : 042-381-3562

E-mail : (半角) onkyoiku@remus.dti.ne.jp

私書箱：〒184-8799 東京都小金井郵便局私書箱 26 *郵便物は私書箱へ

郵便振替口座：00110-6-79672

事務局員：宇田川・亀山・徳山・若尾

※新型コロナウイルスの影響で事務局開局の状況が不規則となることがあります。ご用件はEメールでお願いします。